



霞地区再開発整備 計画の概要

医学部
薬効解析科学講座

石橋 貞彦



統合移転の見通しがついたことで、従来ストップしていた霞地区の再開発計画が動き始めた。霞地区再開発整備委員会の石橋委員長に寄稿してもらった。

この計画は、霞地区を構成する医学部、歯学部、両者の附属病院、原爆放射能医学研究所（原医研）の医療関係五部署の構想と密接な連絡に基づいて、各部署のアイデンティティーに配慮しながら、地区全体の将来像の集大成を目指そうとする、他大学に類をほとんど見ないものであって、当該委員会も五部署を横断して構成されている。

霞キャンパスは、（古い話から始めるが）旧陸軍兵器廠跡に、終戦後しばらく県庁が置かれていた現在地に、前身である県立医科大学から国立に移管され広島大学に加わった医学部医学科および附属病院が、昭和三十二年に移転

してきたのに始まる。以後を経年の略述すると、原医研が、昭和三十三年医学部研究施設として設立され、三十六年に研究所として独立した。

一方、四十年に歯学部、続いてその附属病院が、国立三番目の歯学教育機関として設立された。さらに、医学部では四十四年に薬学科（後に総合薬学科）、平成三年に保健学科が増設され、全国でも稀な三学科編成になった。

筆者が本学に転じてきた昭和四十四年には、グラウンドを前に赤煉瓦の建物が立ち並び、のびやかな感じの、緑多いキャンパスであった。爾来（もつと以前の波瀾万丈も伝え聞いているが、

ここでは触れない）、先輩各位のご尽力により面目は一新し、往時の面影は僅かに医学資料館に残るのみである。

この広いとはいえない難しいスペースに、構成人員数は飛躍的に増加し、教育・研究設備の新設、整備が進められてきたのである。このこと自体は慶賀すべきことであるけれども、結果として過密化に伴う不都合面が次第に出てきた。

一、二例を挙げれば、新設学科を収容する建物もなく、古い病棟が酷使されているのが現状である。放置は許されぬ段階にきている。再開発・整備を考える時点は、東広島市への統合移転が終わろうとしている今をおいてない。

付言すれば、霞地区は、教育・研究だけでなく、広島市を中心に、広い地域の医療センターとしての役割を担っている。また、本地区の再開発は、本学の広島市における顔として、この地域への大学開放や国際化等本学全体に関わる課題であることを認識していただきたい。

本計画で考えるべき要因として、まず大学院を中心にしよとする本学の基本方針や、学部教育の大綱化に沿った教育の高度化、体系化の問題がある。

従来の大学院は、固有の施設、設備の乏しいままに学部に乗っけていたからであった。

今後、各専門分野での研究の深化に加えて、広汎な協調に基づく教育・研究体制の構成を進め、総合的視野を涵養した人材輩出の素地形成が本計画の基本である。そのために、既設の施設の整備に加えて、最先端機器を完備した共同利用施設を計画の中核にすえて

いる。これまで、この種の施設は空きスペースにつくられることが多く、部局によってはかなり不便な位置にあった。アクセスに関し、全部局になるべく同等に便利であってこそ、共同利用施設といえるのではあるまいか。

加えて、本地区で学ぶ学生等の激増に対処するためにも、各種講義室、セミナー室、実験設備の増・新設を急ぎ考えなければならぬ。

なお、診療面では、患者さん重視の姿勢を基盤として、従来の講座・診療科の枠にとらわれぬ有機的総合化の方向で建築面、機器面等の充実計画が担当部会で練られている。これは学内の問題にとどまらないのであって、医療センターとして地域全体の医療機関と協力した有効な運用体制を樹立することも大事なことである。

以上述べたように、本再開発整備計画は、現在地で地域とのつながりを最大限に活かす形で行うことを前提課題としている。従って、現有敷地の効率の利用が基本になる。対策としては、建築の高層化や統合化が考えられるけれども、ハード面は工事関係者と協議すべき問題であり、現在は基本計画のソフトについて全般にわたり、構想をまとめている段階である。

終わりにあたってお断わりするが、本稿の依頼は、霞地区再開発整備委員長を仰せつかつている理由でなされたに違いないけれども、上記（総花的で恐縮だが）は、石橋個人の私見であって、委員長としての公式発言ではない。

（聞いたようなセリフですね）
（いしばし・さだひこ）